2006年12月20日発行

ニュースレター News Letter

No.15

CHRISTIANITY AND CULTURE RESEARCH INSTITUTE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

ご挨拶

キリスト教と文化研究所
所長
森島 牧人

本年も、クリスマスをお祝いする季節となりました。皆さま方には、いかがお過ごしでしょうか。日頃より、当研究所の活動に多くのご支援を賜り、誠に感謝申し上げます。

さて、今回のニュースレターには、二つの公開型プログラムと一つの調査研究報告書を載せています。第一のものは、当研究所資料委員会が6月、7月および10月の三回にわたって企画した、川島大二郎客員研究員による公開研究会の報告です。これは、「N.ブラウンの日本伝道―資料紹介を兼ねて」と題した、N・ブラウンに関する研究報告です。

第二のものは、「バプテスト研究」プロジェクトが10月に実施した、金丸英子氏による「バプテストは今なお、バプテストか？」と題する公開講演会の報告です。同研究プロジェクトは、これまでも本学のバックグラウンドであるバプテスト派について研究を進めてきています。今回は金丸氏の講演を通し、アメリカにおける、特に南部バプテストの動向を知る良い機会となりました。この講演内容は、今年度の研究所所報「キリスト教と文化」第5号に掲載されます。また、同プロジェクトは、これまでの研究成果を『バプテストの歴史的貢献』として、大学出版会から今春発刊する予定です。

第三のものは、「国際理解とボランティア」研究プロジェクトが8月に実施した、タイ北部山岳地区での調査研究報告です。同プロジェクトは、これまでも「人になれ　奉仕せよ」との学院建学の精神の具現化を目差し、タイ北部山岳少数民族（カレン族・アカ族）へのサービスラーニング・プログラムの理念構築と実践をテーマに研究してきました。今回の調査の目的は、アカ族の経済的自立を目差す支援プログラムの可能性を探るものです。

また現在本研究所では、こうしたプロジェクトごとの研究活動を進めるとともに、来年1月に発行予定の研究所「所報」第5号での成果の発表、2月にＫＧＵ関内メディアセンターで持たれる国際理解とボランティア研究プロジェクト企画の「公開セミナー」などの計画を順次進めています。

最後になりましたが、皆さま方の上に主の御祝福が豊にありますようにお祈り致します。また、これら研究所の諸活動をお覚え頂き、今後ともお支え下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。

CONTENTS

あいさつ ―― 1
公開研究会「N・ブラウン」全3回の報告 ―― 2
公開講演会「バプテストは今なお、バプテストか？」―― 3
タイ北部山岳少数民族調査報告 ―― 4
第3回開発教育／国際理解教育コンクール入選記事 ―― 5
客員研究員の広場 ―― 6

公開研究会

「資料委員会」主催：川島大二郎先生
「N.ブラウンの日本伝道－資料紹介を兼ねて」

矢嶋　道文

第1回「N.ブラウンのアッサム伝道について」：①父ブラウン（1836－55）と共に7歳までアッサム（現インド北東部地域）に過ごした娘（エリザ・ブラウン）の伝記『全世界の同類』（*The Whole World Kin*, Fhiladelphia, 1890）についても全40章のうち30章程度しか訳されていない。②川島先生が同訳を試みられた結果、アッサム研究（とくに歴史と用語）の困難なことが判明した。（ブラウンは伝道に際してこの点の研究に心血を注いだ。）③アッサム伝道については、アッサム茶（紅茶）の産業発展と密接な関係を持っているということ。④その時のブラウンの功績により、今でも同地ではアッサム語と英語の辞書が併せて用いられている。

第2回「N.ブラウン『志無也久世無志與』、の初版分冊本の刊行実態とアメリカン・バイブル・ユニオン（ABU）との関係」：①日本最初の新約聖書（翻訳）とされるN.ブラウン『志無也久世無志與』は、通常、明治12（1879）年とされている。しかし、それは本来2巻本である『幾美恵須幾里須登乃／之無也久志與』の内の第1巻四福音書の刊行日のことで、『志無也久世無志與』という表題の一巻本が刊行されたのは翌明治13年4月はじめのことである。②ブラウン『志無也久世無志與』完成までの翻訳経過を年代的に伝えてくれたのは、小沢三郎『幕末明治耶蘇教史研究』である。しかし、戦前に書かれた同書の時代的、資料的制約から残された課題もあった。

第3回「N.ブラウンの翻訳委員会における役割」：N.ブラウンが「聖書翻訳委員会」に招かれた経緯①1872（明治5）9月20日、横浜のヘボン宅会堂で開かれた在日伝道会合同「第1回宣教師会議」において、諸教派各1名選出による新約聖書の共同翻訳が議決され、S.R.ブラウン、ヘボン、グリーンの3名が委員に推挙された。②S.R.ブラウンとヘボンはすでに『馬可伝』『約翰伝』『馬太伝』の三福音書を刊行していたが、それは幕末から続けていた欽定訳の方針に従うものであり「公認本文」を定本とするものであった。③これに対し、1870年イギリスで欽定訳聖書の改訳に伴い、S.R.ブラウンとヘボンらの日本での翻訳方針に不満を抱く声があがった。④ここに登場することになったのが、ABSと対立関係にあるバプティスト派のN.ブラウンである。

全3回の講義を通じ、川島先生は関連貴重資料を多数提示されつつ、ブラウン研究が今なお未完成であるとされて、（1）ブラウンの研究はキリスト教学の領域はもとより、言語・歴史学、民俗・文化史学など多様な側面からも進められるべきであること、（2）関連聖書を丹念に読むチームを編成し、組織的にブラウン研究に取り組む必要があること、などを指摘されました。

参　考

開催された日・時　間・場　所

第1回　6月24日（土）　13：30～15：30
　　金沢八景キャンパス　2号館3階301号室

第2回　7月29日（土）　13：30～15：30
　　金沢八景キャンパス　2号館3階301号室

第3回　10月14日（土）　13：30～15：30
　　金沢八景キャンパス　2号館3階301号室

公開講演会

「バプテスト研究」プロジェクト主催　10月28日（土）
後援：日本バプテスト同盟　日本バプテスト神学校

「バプテストは今なお、バプテストか？」

ー米国南部バプテストの歴史に見る、バプテスト精神の変容

講演者　金丸　英子先生
（西南女学院大学助教授）

去る10月28日（土）午後1時より秋の公開講演会が、金丸英子氏を講師に招き、関内メディアセンターに於いて行なわれた。学内の研究者のみならず後援神学校、又一般からの広い参加者も得て、約30名が良き学びの時をもった。関東学院大学は American Baptist Churches in the USA（旧、北部バプテスト）系の伝統に立つ大学であったが、北部バプテストの歴史を学ぶには何より米国南部バプテストの歴史を学ぶことが有益なのである。従って、関東学院が創立125周年を迎えんとする今日、今回の講演会はわれわれが自らの伝統を振り返るためにも、極めて意義深いものであった。

講師の金丸英子氏はサザンバプテスト神学校（米国ケンタッキー州ルイビル）で Master of Divinity, Master of Theology を、ベーラー大学（テキサス州ウエイコー）で Doctor of Philosophy（教会史）を取得された新進気鋭のバプテスト歴史家である。今回氏は、今日アメリカ屈指の勢力を誇る南部バプテスト連盟の最近の動向を分析するにあたり、歴史的経緯を詳細かつ客観的に辿り、米国南部の社会的、文化的観点からその全体像を可能な限り構造的に解明することにつとめられた。

南部バプテストは奴隷制度問題の是非をめぐり1845年にバプテスト総連合を脱退し独自の教派を結成したが、南北戦争敗退後も南部の文化が教会のあり方を独特な形で包み込み、保守的立場が常に多数派を占めて今日に至っていた。氏は南部バプテストが北部バプテストとの対立から、 Convention 方式という教派組織を採った影響、さらに教会が南部という特殊な地域文化と価値観の担い手となり、「失われた大義」を踏まえた「救霊」といった個人伝道、また国内・国外伝道に力を入れた為、今日のような大きな宗教勢力へと発展したことを指摘された。

またその際同連盟が、自らの教派こそが正しい「聖書主義」に立脚するものとの自負を持ち、「バプテスト継承説」に立つ閉鎖的な教派形成、当時の進化論やリベラリズムなどに反対し、エキュメニカル運動にまで背を向けるという独自な教派形成をなした経緯を説明された。

また1970年以降の社会変化の中での南部の伝統的神学結束の危機と、それへの反動のような形で一気にファンダメンタル・コンサバティブが登場したこと、更に1979 年頃からはウルトラ・コンサバティブなグループが穏健な進歩派を脇に追いやるほどに勢力を拡大し、連盟内の主導権を握り、政治的影響力を行使するに及んだいきさつについて具体的かつ詳細に講演された。

氏の今回の講演で極めて興味深かった点は、南部バプテスト保守派の掲げた信仰宣言の問題性であったが、南部バプテスト連盟が2000年に表明した信仰告白などには本来のバプテスト主義とは全く相いれない内容などが盛り込まれ（性差別的男女観や逐語霊感説的な聖書無謬論）、さらにそれを同連盟の法的拘束力を持つ信仰規範「クレド」とするかのような動きまで現れたいきさつについて触れられた部分であった。

今回の講演を通し、われわれは今日の米国南部バプテスト連盟の抱える問題を学ぶと共に、バプテスト本来の信仰と伝統とは何であったのかを改めて考えさせられた。また、今後の歴史にバプテスト派がいかなる貢献を期待されているのかを深く考えさせられた。

講演会では第一部の講演・質疑応答に続き、第二部の交わりの「茶話会」も行なわれ、冒頭、日本バプテスト神学校の澤野芳久校長の挨拶も行なわれた。関東学院大学が今後こうしたバプテスト研究の分野でも他大学、関係機関との良き連携を保持し、学術的業績をあげられるよう期待しつつ、予定通り、午後4時に閉会した。

（文責・法学部教授、村椿真理）

『国際理解とボランティアの研究活動報告』

飢餓と貧困が尊い命を奪っている。これは、隣国であるアジアにおいても例外ではない。アジアには日本、韓国、台湾のように目覚ましい経済発展を遂げた国々があり、世界から注目を集める一方、いまなお厳しい貧困に悩まされている国々が並存している。同じアジアに住み、富める国の民族として、彼らが最低限人間らしく生きていくための手助けを関東学院大学の建学の精神「人になれ奉仕せよ」に基づいて実践していくことは、社会的に大きな意義があるとともに、本学院における精神の内実化・活性化に寄与すると考える。

こうした意識の下、本研究プロジェクト『国際理解とボランティア』では、ホイコム村をはじめとするタイ国北部の山岳少数民族アカ族の村々を対象に研究及び支援・奉仕活動を進めている。タイ北部国境付近に住んでいたアカ族の場合、タイ国籍を取得できない村民の存在、特産物の皆無といった現状にあることから、地方における雇用機会の創出や地方経済の活性化を目指した経済政策の恩恵を満足に受けることができなかった。ゆえに、現金収入を得るために都市インフォーマルセクターにおける不完全就労や麻薬産業、性産業へ参入することとなったものの、その一方では伝統文化の喪失やHIVへの感染等、深刻な問題が発生している。こうしたことから、この状況から脱するための有効な手段の構築およびその支援が早急に求められている。

そこで、本研究プロジェクトでは、彼らが自発的に発展できる要素を含んだ支援モデルの構築に関して開発経済学的視点および農業経済学的視点から考察を加え、具体的方策を提示することを目的としている。本年の活動として、3回の研究会開催の他、8月には、本年7月に回収したアカ族ホイコム村の実態および村民意識に関する調査票の補足調査と具体的方策を探るための実態調査及びアンケート調査を同村で実施した（菊地客員研究員・勘田客員研究員）。以下、簡単にではあるが、現地調査の成果を紹介しよう。

アンケート調査は、アカ族であり、日本への留学経験を持つヨハン氏の協力を得て実施した。実施の理由は、支援モデルは彼ら自身が自発的に発展できる要素を含んだものにしなくてはならないため、彼らが現状の生活に対してどのような意識を有しているのか、また、示された結果にはどのような背景が存在しているのか等について実態を把握する必要があるからである。分析の結果、①収入の増加が明るい将来を考える上で極めて重要な位置にあること、②現状の農業を中心とした生活では、貧困から脱することができないということ、③若い世代の村外流出に伴い、コミュニティーおよび伝統文化の喪失が発生しているということ、の3点を解明した。

また、実態調査および統計資料の分析からは、タイにおいて農工間所得格差が3倍もあるにもかかわらず、彼らの年間平均所得はタイ北部の農家が得るそれの1/3程度（推定約8,050バーツ）に過ぎないこと、また、支援モデルを構築するあたり、彼らが活用できる資源として、1.アカ族の村々が観光都市チェンライ市に比較的近いという立地条件、2.少数民族であるという希少性、特異性、3.長年生業として農業を営んでいる経験、4.山岳少数民族に対して農業指導・援助等を実施しているNGO団体「21世紀農場」の存在、の4点があることを明らかにした。

これらの結果を踏まえ、我々研究グループでは二重経済発展モデルの枠組みから同村の発展を考察している。その内容および論点については、所報『キリスト教と文化』第5号への投稿原稿（タイトル：「タイ山岳少数民族の自発的発展に関する一考察－アカ族ホイコム村－の事例－」）に記載している。掲載された際には、ぜひ一読頂き、ご意見、ご指摘を賜りたい次第である。

（文責：菊地昌弥）

学校へ行きたい

関東学院六浦小学校　校長　島田 正敏

タイの古都チェンマイから南西に300キロ。車で約６時間走った山岳地に少数民族のカレン族が住むチパレ地方があります。約40の村が点在し、カレン語を話す人々が高床式住居で暮らしています。学校は中心部のティワタ村にしかありません。学校まで歩くと、近い子で４時間、遠い子は２日かかります。そのため多くの子ども達が学校に通えません。1992年、カレンバプテスト同盟の牧師であるダウ先生が、ティワタ村に寮を建てました。しかし現金収入の少ないこの地方での運営は困難な状況になりました。チェンマイ在住の日本バプテスト同盟宣教師の大里英二先生から連絡があり、本校の支援活動が始まりました。

チパレ地方は山岳地帯にあります。夏はとても暑いのですが、冬になると一日の中に春夏秋冬があります。朝は春のようにさわやかですが、時間がたつにつれ日本の夏の暑さになり、夕方からは徐々に冷えていきます。明け方には零度近くまで気温が下がることもあります。最初の寮は、木の葉を屋根にして、床は竹を割って敷き詰めただけの建物でした。外からの冷たい風が吹き抜けます。夜、子どもたちは床にござを敷き、数枚の毛布を取り合うようにして寝ていました。女の子の部屋には、一枚の毛布もありませんでした。私は冬の服装をして、チェンマイで買った寝袋に入りましたが、それでも寒く感じました。寮の食事は、ごはんとおかずが一品だけです。電気もまだ来ていませんでした。

1994年、私が初めてティワタ村を訪問する数日前のことです。私の教え子やそのお母様方、友人から「このお金をタイの子ども達のために使ってください。」と献金が寄せられました。私は現地の様子を見てから何ができるか考えようと思っていました。ですからお預かりしたお金（８万円）をどのように使うべきか迷いながら現地に行きました。そして寮でダウ先生とお話しました。先生は、「来年この寮に子どもを入れたいと言う親が十数人います。しかしこのままでは受け入れられません。今年で寮を閉じなければならない状況です。」と言いました。来年も寮を運営していくためには何が必要なのかを聞きました。先生は、「お米代が欲しいです。一年分のお米を今、買いたいです。２万バーツかかります。私は毎日毎日祈っています！」大里先生に聞くと２万バーツは、日本円で約8万円だそうです。私の財布には、ダウ先生が祈っていたお金が入っていました。ダウ先生の真剣な祈りは、遠い国、日本からの献金でかなえられました。

六浦小学校では、保護者の方々が古着を集めて送ったり、募金活動をしています。「夏の夕べ」や「バザー」では、チパレスマイルと言うお店で不要になった学用品などを販売して、売り上げを献金しています。

集まった献金は、教員が現地に行き寮長のジャトゥー先生に直接お渡ししています。子供たちの活動としては、児童議会にチパレ委員会を設置して、全校で支援活動を展開しています。

支援活動を始めて10年目の2003年には「関東学院六浦小学校第一回タイ訪問団」が現地を訪れました。ティワタ村の寮の敷地に、児童、ぶどうの会、卒業生の献金により新しい女子寮を一棟建てることができました。その献堂式に５年の権田雄大君、４年の勘田ひかるさん、片岡由布子さんと保護者の方々が出席しました。

2004年、「第二回タイ訪問団」が文学部比較文化学科の学生たちと共にティワタ村に行きました。日本からカレーのルーを持参して、寮の子供たちにカレーライスを食べてもらい、また万華鏡を作ったりして交流しました。

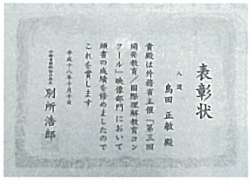
2005年、寮の敷地に「関東学院サービス・ラーニングセンター」を建てることになりました。当時、関東学院大学の大学院で建築を学んでいた大田真人君が設計してくれることになりました。大田君は、数回現地調査をしてから設計しました。調査には、経済学部、文学部、工学部の学生が協力しました。冬には人間環境学部の海外交流事業として５名の学生がティワタ村に行きました。

2006年、「第四回タイ訪問団」が現地を訪問しました。人間環境学部の学生12名も同行しました。学生達は寮の子供達と交流を深め、別れの朝、学生の目には涙があふれていました。

12月31日に行われる「関東学院サービス・ラーニングセンター」献堂式に、児童２名と保護者、教員、森島牧人学院長が出席予定です。

この寮は28人から始まりましたが、今は158人の子どもたちが学校に通っています。しかしまだまだたくさんの子どもたちが、学校に行きたくても行けない状況です。一ヶ月100バーツ（約350円）で、子ども一人が学校に行くことができます。カレン族は、独自の文字と言語を使います。子どもたちの親は、タイ語を理解できません。子ども達がタイで生活していくためには学校でタイ語を学習しなければなりません。子ども達が夢を持って生きていくには、学校での教育が必要です。

（これまでのタイ支援活動を大学入試課の中村敦さんが編集してくれました。このDVDが、外務省主催「第三回開発教育・国際理解コンクール」に入選しました。中村敦さんに心から感謝いたします。）


表彰状

貴殿は外務省主催「第三回開発教育・国際理解教育コンクール」映像部門において審査の成績を得のよしたのでこれを賞します

別所治郎

客員・研究員の広場

経済倫理構築について

客員研究員　加藤　壽宏

はじめまして、加藤壽宏（かとう としひろ）と申します。本学研究所では「国際理解とボランティア」、「キリスト教と日本の精神風土」研究グループで御世話になっております。

今日の社会情勢を垣間見るにつけ思い巡らすのは、経済の繁栄あってモラルがないということであります。経済は繁栄し、我々の生活は便利で豊かなものになったはずである。しかし、その一方で地球規模で我々の生活の歯車が狂いはじめている。つまり、経済の成長のあり方にモラルが失われてしまったことである。

経済を繁栄させた原動力は資本主義における市場原理の過信にある。資本主義の精神がM・ウェーバーのいう勤労や節約、信頼などとは似て非なるものとなり、市場原理は競争を激化させマネーゲームが跋扈する社会へと変質し、利潤極大と規模の拡大化を招き、強いものだけが生き残れば何をしてもよいという意味になってしまった。地域経済や家庭をも壊し、ひいては地球の温暖化、戦争やテロなど貧富の差が拡大し深刻な社会問題が顕在化してしまった。今一度、モラルを再考し資本主義の中に組み込むことが急務と考える次第である。

それではモラルとは何かというと、倫理や道徳ということになるが、私は義理と人情であると考えている。それというのも、義理という社会規範と人情という人のこころ、ぬくもりとが相互にバランスを捉えながらより良い選択をしながら豊かな社会を創出していくことにある。M・ウェーバーのいう資本主義の精神が遵守される所以がここにあるように思えるのです。だからこそ、我々は共感しこころにしみるのである。これは、人間のもつ魂であり、勤勉、努力、誠実、協同、責任感などの博愛主義が経済倫理として構築されることで我々の生活を豊かなものにしていけるのではなかろうかと考えております。

至らぬところが多々あるかと存じますので御指導御鞭撻の程賜ります様何卒宜しく御願い申し上げます。

はじめまして

客員研究員　菊地　昌弥

今年４月から「キリスト教と文化研究所」の一員に加えて頂いた、菊地（きくち）昌弥（まさや）です。東京農業大学で農業経済学を専攻しておりました。専門は農産物流通論と農産物マーケティング論です。

同研究所では、「国際理解とボランティア」の研究プロジェクトに在籍しております。現在、「タイ北部山岳少数民族の自的経済発展に寄与する農業経済的支援モデルの考察」をテーマとして掲げており、本研究プロジェクトの研究会では毎回報告する機会を頂戴しております。また、本年8月にはタイ北部アカ族の村で実施した調査にも参加させて頂きました。そこでは、実学主義と奉仕の精神の重要性を改めて学びました。ここで得た経験は今後の研究活動において大きな財産になることと思います。

タイおよび開発経済学に関しては初心者であり、続出する難題に悪戦苦闘しつつも、小林照夫先生、森島牧人先生をはじめとする頼もしい諸先学より建設的なご意見を頂戴しながら研究を進めております。関東学院大学のモットーである「人になれ　奉仕せよ」の精神に倣い、当研究プロジェクトで対象としているアカ族および当研究所の益々の発展に寄与できるような成果を残せたらと考えております。皆様、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

〈お知らせ〉

今野國男元教授寄贈図書の一部をキリスト教と文化研究所に移管いたしました。

故今野國男元教授は中世修道院研究の権威として知られています。蔵書の寄贈を受けた大学ではこれを図書館文学部分館に配架していますが、この程、未配架の約700冊を「キリスト教と文化研究所」に移管いたしました。本研究所には約300冊を書棚に納めており閲覧が可能となっています。この他の図書は金沢文庫キャンパス「小講堂」展示室の倉庫に一時保管しております。

関東学院大学　キリスト教と文化研究所
〒236-8501
神奈川県横浜市金沢区六浦東一丁目50番1号
TEL：045-786-7873（研究所直通）
発行者：森島　牧人
Director: Makito Morishima